（３８）セルリー

ア　各病害虫の防除

葉枯病

斑点病

軟腐病

アブラムシ類

ナモグリバエ

マメハモグリバエ

ハスモンヨトウ

ヨトウムシ

ハダニ類

ナメクジ

ア　各病害虫の防除

【留意事項】
（□は総合防除計画に掲載している病害虫）

葉枯病

（耕種的・物理的防除）
1　48℃の温湯に 30 分間浸漬して種子消毒する。

斑点病

（耕種的・物理的防除）
1　発病ほ場からは採種しない。
2　被害株は抜き取り、土中深く埋めるか処分する。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　微生物殺菌剤は発病前から予防的に処理する。
2　発病ごく初期から７～10 日おきに、薬剤を散布する。

軟腐病

（耕種的・物理的防除）
1　３～４年以上輪作する。
2　排水を良くする。
3　発病株は速やかに抜き取る。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　微生物殺菌剤は発病前から予防的に処理する。
2　発病ごく初期から７～10 日おきに、薬剤を散布する。

アブラムシ類

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　生物農薬を予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布（殺菌剤を含む）とを併用する場合は、農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。
2　気門封鎖剤を散布する。
3　発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ナモグリバエ

・共通防除の章のハモグリバエ類の防除の項を参照する。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

マメハモグリバエ

・共通防除の章のハモグリバエ類の防除の項を参照する。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ハスモンヨトウ

・共通防除の章のハスモンヨトウの防除の項を参照する。

（予防に関する措置）
1　施設栽培では､成虫の侵入防止対策として､換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
2　ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
3　交信かく乱剤を活用した防除を行う。

（判断、防除に関する措置）
1　発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
2　卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
3　農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
4　生物農薬を活用した防除を行う。
5　施設栽培においては、栽培終了後に密閉処理を行う。
6　作物残さを適切に処分する。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　交信かく乱剤を活用する。
2　生物農薬を散布する。
3　若齢幼虫時に、薬剤を施用（散布）する。

ヨトウムシ

（予防に関する措置）
1　ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
2　施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫 ネットによる被覆や防蛾(が)灯（黄色灯）の夜間点灯を行う。
3　施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

（判断、防除に関する措置）
1　卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
2　生物農薬を活用した防除を行う。
3　発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
4　収穫物残さを適切に処分する。

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　生物農薬を散布する。
2　若齢幼虫時に、薬剤を施用（散布）する。

ハダニ類

（薬剤防除）　農薬登録情報
1　生物農薬を予防的に散布する。
※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。
※ハダニ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。
2　気門封鎖剤を散布する。
3　発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ナメクジ

・共通防除の章のナメクジ・カタツムリの防除の項を参照する。

（耕種的・物理的防除）
1　野菜くずの捨て場等の発生源を除去する。
2　ほ場の通風や排水を良好にし、地表部を乾燥させる。
3　農作物の過繁茂を避け、収穫後の畑はできるだけ早期に整理する。
4　畑周辺の小かん木、小竹などの茂みを伐採整理し、不必要な石積等は取り除く。
5　畑周辺の清掃を図った上で、潜伏場所となるような濡れむしろ等を設置し、誘引捕殺する。

（薬剤防除）　農薬登録情報

1　粒剤は雨が降ると有効成分が流亡してしまうので、天候を見極めて活動直前の夕刻に処理する。ハウスや温室内では、２～３日間はかん水がかからないようにする。残効期間は短い。